

## 大阪アクセントの世代差

郡 史 郎 (大阪外国語大学)  
杉藤美代子 (大阪樟蔭女子大学)

## 要旨

大阪方言の高年話者3名と若年話者3名の3拍以上の約54,000語のアクセントデータに基づいて、高年話者と若年話者のアクセントの差を考察し、現代大阪アクセントの実態と変化動向を検討した。全員のアクセントが一致する語は全体の46%、高年話者と若年話者のアクセントが対立する語は2%である。この2%の内訳は、①核の有無と位置は保持したまま、高起式から低起式へ、あるいは低起式から高起式へという式の転換(39%)、②高年のアクセントで特殊拍に核があるような語で、若年がは特殊拍に核を置くことを避け、その1拍前に核を規則的にずらす場合(22%)、そして、③若年における無核化(15%)、その他24%である。ただし、①については高起・低起の別は高年においてもかなり流動的なものであり、世代差というよりも個人間の変異とみるべきものかと思われ、③についても現代大阪アクセントの変化傾向として顕著なものとは言い難い。総体的にみれば高年と若年のアクセントが対立する語は少ないものの、これまでの大阪アクセントらしさを支えてきた特徴のいくつかを失わせるような変化が生じつつあり、これと並行して東京アクセント化する語が増えている。

Generational Differences of Word-accent  
in the Osaka Dialect

Shiro KORI  
Osaka University of Foreign Studies  
Miyoko SUGITO  
Osaka Shoin Women's College

## Abstract

Generational differences in word tonal pattern (accent) of the dialect of the City of Osaka were examined using the same corpus as Sugito and Tahara's study (in this volume). The accents of the three younger speakers (20's) and the three older speakers (from 50's to 70's) were opposed in 2% of 54,000 words consisting of three and more moras examined in this study, while in 46% all the 6 speakers agreed. Three major types of the generational opposition were observed: (1) exchange of the word initial tone (H to L, or L to H; 39% of the opposing cases), which is a phonological tonal level from the word-initial mora to the nucleus mora (H mora followed by L's), (2) shift of the nucleus by the younger speakers to the first mora of long syllables when the older speakers have the nucleus in the second (=last) mora (22%), and (3) disappearance of the nucleus in the young speakers (15%). Further analysis revealed that the first type of opposition was a result of the instability of the initial tone, and the third type of opposition was not a general tendency observable for the remaining 52% of the words examined in the study. An influence of the Tokyo accent was also observed.

## 1. 資料と方法

本稿が基づく資料は、杉藤が編纂中の大阪アクセント辞典用のデータベースである。このデータベースは、NHK発音アクセント辞典とほぼ共通の約7万語について、大阪市出身の高年話者3名（50代前半男性 [No.1]、60代前半男性 [No.2]、70代前半女性 [No.3]）と若年話者3名（全員20代前半女性）、合計6名のアクセントを杉藤が聴取したデータを含む。本稿はこれを用いて、大阪の高年話者と若年話者のアクセントの差について考察する。高年話者とはいっても3人の間には年齢的に相当の開きがあるが、ここでは一括して扱った。アクセント辞典の目的、性格については杉藤(1986)を、収録語彙のアクセントの全体的な特徴については杉藤・田原(1989)をそれぞれ参照されたい。

我々の目的は、広く大阪の高年と若年の話者の間に存在する世代差を抽出することである。しかし、ここで我々が扱った資料の話者は、高年・若年3名ずつに限られている。そこで世代差抽出の手順としては、まず高年の3名があるひとつのアクセントで一致し、若年3名どうしが高年とは別のアクセントで一致しているような語彙を取り出し（以下これを「高若対立例」と呼ぶ）、そこからアクセントの対立のパターンを類型化する。次いで、こうして取り出した対立パターンが、対立語以外の多くの語彙でも観察される傾向かどうかを検討する。このように、ここでは世代差を抽出するにあたって、高年3名のアクセント型の出現頻度の合計と若年3名のアクセント型の出現頻度の合計に見られる差には基づかない。これは、そのような差が特定の話者の特異なふるまいに由来する可能性があるからである。特定の話者にかたよらない高若対立パターンは、なお個人差による可能性も捨てきれないが、真の世代差である蓋然性が高いと考える。

作業にあたっては、この6名全員のデータがそろっている6万6千語について、拍数別に、① 6名の話者のそれぞれについて、どんなアクセント型がどのくらい現れるか（型ごとの個人別出現度数）、そして② 「型ごとの個人出現度数」の高年、若年、全員についての合計、③ 各アクセント型ごとに、高年話者3名のアクセントが一致する語数、および若年話者3名のアクセントが一致する語数、そして6名全員の一致語彙数（「一致度数」）、さらに④ 高年3名が共通してある型を有し、若年3名が一致してこれとは異なる型を持つような語の数（「高若対立度数」）を計算した。表1は、8拍までの語について、高年話者と若年話者の出現度数、両者の一致度数、および対立度数を示す。4拍語以上については6名の出現度数の合計が全体の2%以上の型のみを掲げた。表2は、高若対立例について、どの型からどの型にどのくらいの数の語が変わっているかを、拍数別に示す。また、高若でアクセントが対立している語の一覧を付録として稿末に付した。以下の考察では、品詞や語種は特に断わらない限り一括して扱う。

なお、大阪では従来2拍名詞の4類と5類は、「そら( \_ )」～「そらが( \_ )」(空)に対し「あめ( \_ \ )」～「あめが( \_ )」(雨)のように語単独の発話でも区別されていたが、語単独発話時には両者とも \_ で区別がなく、次語への接続のしかたの違いによって両者を区別する話者が増えつつあることがすでに知られている。1拍語にも同様の問題がある。しかし現在のところ、1拍語と2拍語が音調的に次語にどう続いていくかについては調査が完了していない。したがって、以下の分析においては、おもに3拍以上の語について考察し、1拍語と2拍語についての考察は部分的に行なうにとどめる。

次の第2節では、主に出現度数データに基づいて、個々のアクセント型に属する語数の増減という点から世代差を概観し、第3節以下では高若対立例を手がかりとして、また必要に応じて対立例以外の語のアクセントデータを参照しながら、現代大阪アクセントにどのような世代差があるかを検討する。

## 2. 概観

### 2. 1. 世代間のアクセントの一致率と対立率

本稿のための検索調査を行なった時点で6名の話者全員のデータがそろっている3拍以上の語彙は53, 769語である。このうち高年若年をあわせた話者全員のアクセントが一致しているのは、半数弱の46%であった。一致率は拍数の少ない語ほど高く、拍数の多い語ほど低くなる。すなわち、3拍語で41%、4拍語で54%、5拍語で41%、6拍語で36%、7拍語で45%、8拍語で40%、9拍語で16%、10拍語以上では20%である。また、6名のうち5名以上が一致している率を見ると、3拍以上の語では全体の67%、すなわち2/3である。拍数別では、3拍語から9拍語までそれぞれ64、73、64、56、67、59、38%、10拍語以上では42%となる。一方、高年は高年で一致し、若年は若年で一致しつつも、世代間では対立している3拍以上の語(すなわち高若対立例)は総数で1255、全体の2%である。高若対立度数は、6拍語を除けば拍数の多少とは独立にほぼ一定で、1ないし2%となっている。6拍語では対立率は6%と他に比べてきわだっただけが多いが、この理由は第5節で述べる。

### 2. 2. アクセント型の出現度数から見た世代差

表1は、6名のデータがそろっている8拍までの語について、高年話者と若年話者の出現度数、および両者の一致度数、対立度数を示す。4拍語以上については6名の出現度数の合計が全体の2%以上の型のみを掲げた。この節では、この表をもとに、高年・若年間のアクセント型の出現度数の差について検討する。

表1 高年話者と若年話者のアクセント型の出現度数および一致度数

拍数 = 1 語数 = 215 全員一致 = 152 (71%) 高・若対立 = 2 (1%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
—	161 (75%)	173 (80%)	177 (82%)	192 (89%)	180 (84%)	183 (85%)	148 (88%)	168 (90%)	140 (92%)	0	2
↘	19 (9%)	17 (8%)	12 (6%)	6 (3%)	12 (6%)	6 (3%)	8 (5%)	5 (3%)	3 (2%)	1	0
/	34 (16%)	23 (11%)	25 (12%)	17 (8%)	23 (11%)	26 (12%)	13 (8%)	13 (7%)	9 (6%)	1	0
計	215	215	215	215	215	215	169	186	152	2	2

拍数 = 2 語数 = 2881 全員一致 = 1576 (55%) 高・若対立 = 55 (2%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
—	489 (17%)	502 (17%)	584 (20%)	562 (20%)	475 (16%)	615 (21%)	339 (17%)	347 (17%)	278 (18%)	11	3
—	1638 (57%)	1832 (64%)	1757 (61%)	1927 (67%)	1926 (67%)	1720 (60%)	1377 (68%)	1511 (73%)	1148 (73%)	4	29
—	494 (17%)	404 (14%)	354 (12%)	383 (13%)	456 (16%)	491 (17%)	226 (11%)	220 (11%)	150 (10%)	13	23
—	260 (9%)	143 (5%)	183 (6%)	9 (0%)	24 (1%)	54 (2%)	75 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	27	0
計	2881	2881	2881	2881	2881	2881	2017	2078	1576	55	55

拍数 = 3 語数 = 12256 全員一致 = 5055 (41%) 高・若対立 = 210 (2%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
—	2928 (24%)	3052 (25%)	4014 (33%)	3591 (29%)	3421 (28%)	2438 (20%)	2132 (29%)	1757 (24%)	1409 (28%)	55	35
—	485 (4%)	453 (4%)	703 (6%)	231 (2%)	401 (3%)	296 (2%)	179 (2%)	75 (1%)	42 (1%)	20	3
—	3569 (29%)	4708 (38%)	3844 (31%)	4190 (34%)	4441 (36%)	3545 (29%)	2736 (37%)	2930 (40%)	2087 (41%)	37	74
—	4425 (36%)	3215 (26%)	2979 (24%)	3527 (29%)	3272 (27%)	5252 (43%)	1999 (27%)	2244 (30%)	1348 (27%)	58	56
—	811 (7%)	811 (7%)	658 (5%)	707 (6%)	702 (6%)	698 (6%)	339 (5%)	356 (5%)	167 (3%)	40	42
計	12256	12256	12256	12256	12256	12256	7388	7364	5055	210	210

拍数 = 4 語数 = 22553 全員一致 = 12236 (54%) 高・若対立 = 446 (2%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
—	13072 (58%)	13748 (61%)	15370 (68%)	14614 (65%)	14516 (64%)	13472 (60%)	11744 (74%)	11798 (73%)	9946 (81%)	102	133
—	709 (3%)	739 (3%)	734 (3%)	460 (2%)	653 (3%)	531 (2%)	265 (2%)	162 (1%)	68 (1%)	36	14
—	1096 (5%)	1140 (5%)	1317 (6%)	388 (2%)	724 (3%)	516 (2%)	484 (3%)	163 (1%)	129 (1%)	104	3
—	1624 (7%)	1552 (7%)	1214 (5%)	1421 (6%)	1567 (7%)	1411 (6%)	696 (4%)	942 (6%)	453 (4%)	57	30
—	3564 (16%)	2753 (12%)	2126 (9%)	2761 (12%)	2502 (11%)	3451 (15%)	1506 (10%)	1524 (9%)	938 (8%)	94	77
—	785 (3%)	695 (3%)	404 (2%)	690 (3%)	577 (3%)	760 (3%)	267 (2%)	347 (2%)	156 (1%)	18	23
—	1430 (6%)	1434 (6%)	1160 (5%)	2073 (9%)	1890 (8%)	2151 (10%)	735 (5%)	1291 (8%)	528 (4%)	28	166
計	22553	22553	22553	22553	22553	22553	15770	16254	12236	446	446

表1 ( 続き ) 高年話者と若年話者のアクセント型の出現度数および一致度数

拍数 = 5 語数 = 9785 全員一致 = 4003 (41%) 高・若対立 = 210 (2%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
_____	2290 (23%)	2135 (22%)	2682 (27%)	2377 (24%)	2501 (26%)	2070 (21%)	1827 (29%)	1677 (29%)	1361 (34%)	46	28
_____	638 (7%)	606 (6%)	504 (5%)	353 (4%)	394 (4%)	355 (4%)	202 (3%)	168 (3%)	89 (2%)	17	5
_____	2771 (28%)	3332 (34%)	3424 (35%)	2877 (29%)	3163 (32%)	2314 (24%)	2119 (34%)	1722 (29%)	1229 (31%)	60	37
_____	1182 (12%)	1118 (11%)	959 (10%)	1345 (14%)	1184 (12%)	1490 (15%)	732 (12%)	842 (14%)	574 (14%)	12	49
_____	1836 (19%)	1623 (17%)	1364 (14%)	1585 (16%)	1449 (15%)	2296 (23%)	995 (16%)	913 (16%)	555 (14%)	53	37
_____	291 (3%)	353 (4%)	267 (3%)	716 (7%)	567 (6%)	533 (5%)	146 (2%)	348 (6%)	118 (3%)	1	45
計	9785	9785	9785	9785	9785	9785	6209	5874	4003	210	210

拍数 = 6 語数 = 6139 全員一致 = 2217 (36%) 高・若対立 = 347 (6%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
_____	964 (16%)	975 (16%)	1164 (19%)	1091 (18%)	1155 (19%)	1013 (17%)	825 (21%)	800 (23%)	627 (28%)	24	41
_____	325 (5%)	263 (4%)	357 (6%)	227 (4%)	270 (4%)	242 (4%)	170 (4%)	122 (3%)	88 (4%)	7	3
_____	2336 (38%)	2738 (45%)	2709 (44%)	1593 (26%)	1804 (29%)	1713 (28%)	1896 (48%)	998 (28%)	834 (38%)	271	12
_____	672 (11%)	671 (11%)	675 (11%)	1462 (24%)	1402 (23%)	1015 (17%)	326 (8%)	762 (22%)	245 (11%)	6	206
_____	259 (4%)	224 (4%)	203 (3%)	330 (5%)	271 (4%)	336 (5%)	136 (3%)	181 (5%)	100 (5%)	3	24
_____	790 (13%)	611 (10%)	525 (9%)	689 (11%)	561 (9%)	912 (15%)	377 (10%)	372 (11%)	210 (9%)	22	35
_____	335 (5%)	295 (5%)	178 (3%)	402 (7%)	318 (5%)	421 (7%)	119 (3%)	169 (5%)	69 (3%)	8	15
計	6139	6139	6139	6139	6139	6139	3963	3531	2217	347	347

拍数 = 7 語数 = 1967 全員一致 = 883 (45%) 高・若対立 = 27 (1%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
_____	84 (4%)	77 (4%)	140 (7%)	88 (4%)	96 (5%)	78 (4%)	59 (5%)	54 (4%)	43 (5%)	2	0
_____	89 (5%)	73 (4%)	101 (5%)	77 (4%)	95 (5%)	85 (4%)	45 (4%)	43 (3%)	20 (2%)	0	1
_____	776 (39%)	836 (43%)	873 (44%)	821 (42%)	840 (43%)	749 (38%)	654 (52%)	637 (52%)	520 (59%)	9	5
_____	225 (11%)	302 (15%)	274 (14%)	277 (14%)	278 (14%)	195 (10%)	178 (14%)	144 (12%)	107 (12%)	7	1
_____	269 (14%)	210 (11%)	177 (9%)	229 (12%)	192 (10%)	280 (14%)	129 (10%)	135 (11%)	90 (10%)	7	7
_____	178 (9%)	136 (7%)	135 (7%)	205 (10%)	153 (8%)	252 (13%)	89 (7%)	110 (9%)	60 (7%)	1	7
_____	66 (3%)	72 (4%)	51 (3%)	43 (2%)	77 (4%)	52 (3%)	31 (2%)	26 (2%)	16 (2%)	0	0
計	1967	1967	1967	1967	1967	1967	1257	1232	883	27	27

拍数 = 8 語数 = 789 全員一致 = 319 (40%) 高・若対立 = 11 (1%)

アクセント	出現度数						一致度数			高・若対立度数	
	高年話者			若年話者			高年話者	若年話者	全員	高年	若年
	1	2	3	1	2	3					
_____	71 (9%)	69 (9%)	89 (11%)	56 (7%)	89 (11%)	61 (8%)	44 (9%)	32 (7%)	24 (8%)	2	1
_____	154 (20%)	148 (19%)	182 (23%)	137 (17%)	147 (19%)	137 (17%)	108 (23%)	83 (19%)	67 (21%)	2	1
_____	274 (35%)	317 (40%)	312 (40%)	335 (42%)	306 (39%)	299 (38%)	226 (49%)	226 (51%)	179 (56%)	3	3
_____	32 (4%)	21 (3%)	12 (2%)	28 (4%)	29 (4%)	33 (4%)	10 (2%)	15 (3%)	6 (2%)	0	1
_____	80 (10%)	74 (9%)	55 (7%)	98 (12%)	75 (10%)	104 (13%)	36 (8%)	53 (12%)	26 (8%)	0	3
計	789	789	789	789	789	789	465	447	319	11	11

まず、世代間に極端な差はないということが言える。特に、数において優勢な型では世代間の差は少ない。次に、世代間で出現度数の差が顕著な型を抽出するために、各世代内に属する3名の間では出現度数が安定しつつ、かつ両世代の間できわだった差があり、真の世代差である可能性が高いと思われるアクセント型を拍数別に見ると、

(1) 1拍語: 高年でも少数型であるところの拍内下降型が、若年ではいっそう減少している。拍内下降型は高年話者では1拍語全体のそれぞれ9、8、6%、若年話者では3、6、3%である。

(2) 2拍語: 低く始まり末尾拍で高から低へと下降する型(—\ )は、大阪アクセントの特徴のひとつである。この型は高年の3名においてもそれぞれ9、5、6%と少数派であるが、若年ではわずか0、1、2%に過ぎない。この型は若年では単独発話時に —<sup>—</sup> で、格助詞等に —<sup>—</sup> と低接する音調(ここでは仮に —<sup>—</sup>B音調と呼ぶ:音韻論的には —\ と同じアクセント型)に変化しつつあることが知られている(杉藤(1981, 1982)参照)。しかし、この —<sup>—</sup>B音調は、もともと存在しているような、単独発話時に —<sup>—</sup> で、格助詞等に —<sup>—</sup> と接続する音調(—<sup>—</sup>A音調)との音韻的対立は保持される。本資料でも —\ 型を有していた語は基本的にはこの変化に従っているものと思われるが、若年でも —\ は皆無ではない。またこれとは別に、高年で —\ の語が若年で —<sup>—</sup> で表われる場合もある(表2参照)。現在のところ格助詞等への接続形式がどうなっているかの調査は済んでおらず、このあたりの正確な推移状況はいまのところ不明である。

なお、この資料からではないが、同一話者でも —<sup>—</sup>B音調と —\ 音調の両方が現れることがあり、それが語について定まっていたり、また同じ語でも言い切りとして言うか問い返しとして言うかで変わってくることもある(郡(1984))。

(3) 3拍語: —<sup>—</sup>—<sup>—</sup> は高年でも少数派であるが、若年ではますます少なくなっている(高年: 4、4、6% → 若年: 2、3、2%)。—<sup>—</sup>—<sup>—</sup>についてはすでに榎垣実氏が昭和30年に中学2年生16名(現在48才程度)を対象に24語を調査した結果、おもに —<sup>—</sup>—<sup>—</sup> (43%)、あるいは —<sup>—</sup>—<sup>—</sup> (29%)となり、—<sup>—</sup>—<sup>—</sup> は12%にすぎなかったと報告している。われわれの資料のうち高年3名と若年3名のアクセントが対立する例(表2、および付録参照)では、高年の —<sup>—</sup>—<sup>—</sup> は若年ではおもに —<sup>—</sup>—<sup>—</sup> で現れている(20例のうち16例)。

次に、低く始まり末尾拍で高から低へと下降する型 —\ は高年でもまれであるが、若年では皆無に近い。出現回数で言えば、—\ は高年話者がそれぞれ7、5、13回に対し、若年では2、0、2回である。

(4) 4拍語: —<sup>—</sup>—<sup>—</sup>—<sup>—</sup> は高年でも少数派であったが、若年では高年の約半数に減少している(高年5、5、6% → 若年2、3、2%)。一方、—<sup>—</sup>—<sup>—</sup>

— は増えている（高年6、6、5% → 若年9、8、10%）。高若対立例（表2、付録参照）を見ると、このふたつは対の変化であり、高年の — — — — は若年では概ね — — — — （104例中78例）になっていることがわかる。

また、高年でも少数であるために表1にはないが、 — — — — が若年では著しく減っている（出現回数にして高年76、356、67 → 若年29、11、3）。

（5）5拍語： 数は多くないが — — — — が2倍ほどに増えている（高年3、4、3% → 若年7、6、5%）。 — — — — は減っているように見える（高年7、6、5% → 若年4、4、4%）。

（6）6拍語： — — — — が2倍ほどに増え（11、11、11% → 24、23、17%）、 — — — — が減っている（38、45、44% → 26、29、28%）。また、わずかであるが — — — — は増えているようにも見える（4、4、3% → 5、4、5%）。

以上のうち、量的にもっとも顕著なものは、6拍語における若年の — — — — の減少と、同じく — — — — の増加である。各世代の平均で言えば、 — — — — は高年で2594語のところ、若年では891語減少して1703語になり、 — — — — は高年の673語から若年では620語増加して1293語になっている。第5節で詳しく検討するが、このふたつは対になった変化であり、個人差ではなく、明かな世代差である。高年話者の — — — — に若年話者が — — — — で対立している語を見ると（付録参照）、ほとんどは4拍+2拍の漢語複合名詞である。そして、複合語のアクセント規則からいけば、前部構成要素の最終拍にアクセント核がくるべきところ、ここではその拍が特殊拍であるような例ばかりである。この変化は、このような場合に若年話者が特殊拍を避けて核を一拍前にずらすことによって生じた変化と考えられる。6拍語で他の拍数の語より高若対立率がきわだって高いのはこのためである。この現象は5拍語にも見られる。

このほかの重要な変化傾向として、1~3拍語の拍内下降の消失が指摘できる。また、高年の高起式で語頭から2拍めに核のある型の減少も顕著である。表2と付録で高若対立例を見ると、この現象は3、4、5拍語に観察されるが、若年では低起式で語頭から2拍めに核のある型になっている。これは語頭の2拍のみが高いことを避ける変化と考えることもできるし、4、5拍語では「小」「不」「無」など1拍接頭辞のつく語が多くを占めていることから、1拍接頭辞のつく語に共通の変化と見ることもできる。6拍語以上では語頭から2拍めに核のある型はもともときわめて少ない。

また量としては少数ではあるが、4拍語の — — — — の減少も重要な意味を持つ。第7節で詳述するが、このような2アクセント単位からなる語の減少は、拍内下降の消失とともに、これまで大阪らしさをになってきた特徴が消失しつつあることを示唆しているからである。

表2 高年話者3名と若年話者3名のアクセントの対立パターン

2拍語の高若対立例 (55語)

高年 \ 若年	---	-_	__
---		8	3
-_	1		3
__	2	11	
-\		10	17

・ 助詞「は」などに \_\_ と続くもの、および -\_ と続くものの両者を含む

3拍語の高若対立例 (210語)

高年 \ 若年	---	__-	-__	___	__-
---			7	45	3
__-	3		1		16
-__	17			9	11
___	13	3	30		12
__-	2		36	2	

・ \_\_\_ / \_\_- の対立例はすべて2拍目が促音の語である。



表2 (続き) 高年話者3名と若年話者3名のアクセントの対立パターン

4拍語の高若対立例 (446語)

高年 \ 若年	----	---_	--__	-___	____	___-	__--	-__-
-----		11	2	10	62	9	8	
----- _	7					8	21	
----- __	23	1		1		1	78	
----- ___	12	2			2		41	
----- ____	79			1		4	10	
----- ____ _	3		1	2	5		7	
----- ____ ___	9			10	8	1		
----- ____ ____ ___				6			1	

5拍語の高若対立例 (210語)

高年 \ 若年	-----	----- _	----- __	----- ___	----- ____	----- ____ _	----- ____ ___	----- ____ ____ ___	----- ____ ____ ____ ___
-----		3	6			35		1	1
----- _			14		2		1		
----- __	16	1		1	4	3		30	5
----- ___	1								10
----- ____	8							4	
----- ____ _			2			2		2	
----- ____ ___	1		14			9			29
----- ____ ____ ___	1								

その他 4 (---\_ → ----\_、 \_\_\_-- → ---\_、 \_\_\_-- → ----、 \_\_\_-- → ----)

表2 (続き) 高年話者3名と若年話者3名のアクセントの対立パターン

6拍語の高若対立例 (347語)

高年 \ 若年	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
-----		3	1	1		17			
----- _			4				2		
----- _	38			197	1	1	1	32	1
----- _	1								5
----- _	2							1	
----- _								1	
----- _			7	1		6			8
----- _				7				1	
----- _									1

その他 7 (-\_ \_ \_ → -\_ \_ \_ (2例)、\_ \_ \_ \_ → -\_ \_ \_、\_ \_ \_ \_ → \_ \_ \_ \_、  
\_ \_ \_ \_ → \_ \_ \_ \_ (2例))

### 3. 高若対立例から見た世代差

表2は、高若対立例について、どの型からどの型にどのくらいの数の語が変わっているかを、拍数別にクロス表として示したものである。また、高若で対立している語の一覧を付録として稿末に付した。

対立例のうち全拍数を通じて目だつのは、次の3つのタイプのものである。

①「甘酒（高年  $\text{---} \text{---} \Rightarrow$  若年  $\text{---} \text{---}$ ）」、「特訓（ $\text{---} \text{---} \text{---} \Rightarrow$   $\text{---} \text{---}$ ）」のように、核の有無の別や核の位置は保持したまま、高起式から低起式へ、また逆に低起式から高起式へという高起・低起の式の転換。

②「環状線（ $\text{---} \text{---} \text{---} \text{---} \Rightarrow$   $\text{---} \text{---} \text{---}$ ）」、あるいは「高校生（ $\text{---} \text{---} \text{---} \Rightarrow$   $\text{---} \text{---} \text{---}$ ）」のように、若年話者において、引く音、つまる音、はねる音という特殊拍上に核を置くことを避けるための核の前1拍ずれ。6拍語と5拍語に多い。

③「豪傑（ $\text{---} \text{---} \Rightarrow$   $\text{---} \text{---}$ ）」、「立ち退き先（ $\text{---} \text{---} \text{---} \Rightarrow$   $\text{---} \text{---}$ ）」のような無核アクセントの増加。

3拍語以上で高年話者と若年話者のアクセントが対立するのは1255語であるが、このうち①の「式の転換」ととらえられるものが39%、②の「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」にあたるものが22%、③の「無核化」に属するものが15%で、この3つのタイプで全体の76%をカバーする。このほかにも、少数であるが重要な変化傾向が対立例の中にいくつか認められる。すなわち④2アクセント単位以上からなる型の減少、⑤特定の形態素をもつ語の変化である。さらに、⑥アクセントの東京化かと思われる例が少なからずある。④以下については第7節以降で述べることにして、まず「式の転換」、「特殊拍上の核を避けるための核の前1拍ずれ」、「無核アクセントの増加」という3つの大きな現象について、これらが真の意味で世代差と言えるようなものか、個別に検討する。

### 4. 高起・低起の転換

高若対立例1255語のうち、「高起・低起の式の転換」を起こしている語は493語（39%）ある。量としては約5対2で高起式から低起式への転換が多いが、もともと高年話者でも低起式の語は高起式より少数であるので（個人差もあるが、平均して高起式7に対して低起式3）、高起から低起への転換と低起から高起への転換の割合には、実質的な差はないと考えられる。高起・低起の転換を起こしている語彙を見ると（付録参照）、5拍以上の複合語については、前部

要素の単独発話時のアクセントに高起・低起の転換が生じているものは、複合語になったときにも同様に式が転換していることがわかる。すなわち、複合語の式はその前部複合要素の単独発話時の式を引き継ぐという規則は生きている（例：「オレンジ」 $\text{---}$   $\Rightarrow$   $\text{---}$ 、 $\text{---}$ 、「オレンジジュース」 $\text{---}$   $\Rightarrow$   $\text{---}$ ）。ただし、前部要素に低起化傾向が認められないにもかかわらず複合語で低起式が現れる例もある（例：「工業」は6名とも高起式であるが、「工業製品」では高年1名、若年2名が低起式）。

一方、4拍以下の語については、特定の語形成や形態素をもつ語に生じた変化ということで説明できるものもあるが（第8節参照）、それ以外の大部分の語について高起・低起の転換を説明するような要因は見いだしがたい。

そこで、総語彙について調査したところ、3拍以上の語で6名の話者がすべて一単位アクセント型（第8節参照）をとる約5万1千語のうち、19%に当たる9480語に、核位置が6名とも同じでありながら、話者によって高起・低起がまちまちであるという現象が見られた。同じ核位置でありながら個人により高起低起がまちまちであるような語について、どの話者が高起式をとり、どの話者が低起式をとるかを集計し、拍数別に図示したのが図1である。

図1からも明かなように、このような場合に高起・低起のどちらをとるかという割合については世代間に一貫した差はなく、むしろ高年の3番目の話者（最高年）が高起を特に好み、若年の3番目の話者が低起を特に好むという個人間の変異と見ることができる（総数から見ると、高年話者が低起式をとる割合はそれぞ



図1 核位置が同じ場合の式

れ55、41、24%、若年では48、38、71%）。したがって、高起・低起の区別はそれほど固定したものではなく流動的であるといえることができるかと思われる。実際、4拍以上の長めの語なら、核の位置さえ正しければ、高起で発音されるのを聞いても低起で発音されるのを聞いても不自然さはないし、核位置をまちがえた発音を聞いたときほど異様ではないと言う大阪語話者は多い。（なお、高起低起の区別を仮に捨象して、核の有無と位置のみから6人全員の話者の一致率を見てみると、3拍以上の1アクセント単位からなる語全体の2/3にあたる68%が一致ということになる。）

大阪アクセントを音韻論的に特徴づけるのは、核の有無およびその位置と、高く始まるか、あるいは低く始まるかということの2点である。このうち後者が音韻論的にも聴覚的にも大阪アクセントらしさをになっている。しかし我々のデータは、大阪アクセントらしさを支える大黒柱とされていた特徴が意外に脆弱であったことを示している。ただし、この高起と低起という「式」の流動性は、実は以前からも存在していたものかもしれない。単にこれまで注目を引かなかっただけのものか、現在の高年話者の世代から生じてきた比較的最近の現象であるかは、80才台以上の話者のアクセントを検討する必要がある。

なお、式の流動現象は、基本的に高起無核型と低起無核型しかない動詞の終止形や、高起有核しかない単純形容詞の終止形のアクセントにも認められる。たとえば、2拍以上の動詞で調べ得た4392語のうち、6名の話者全員のアクセントが一致しているものは74%（うち高起無核が77%、低起無核が23%）であり、残り26%は式がまちまちである。ここで低起式をとることが特に多いのは、やはり若年の3番目の話者であり（63%が低起）、少ないのはやはり高年の3番目の話者である（32%が低起、他の話者は45～55%）。

3、4、5拍語で、高年の高起式で語頭から2拍めに核のある型が若年では低起式で語頭から2拍めに核のある型になる現象があるが（第2、2節参照）、これは式の流動ではなく、高起から低起への一方向の変化である。

#### 5. 特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ、および語音とアクセントとの関係

「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」に属するのは277語、高若対立例全体の22%であるが、6拍語、次いで5拍語に多い。これは、この現象が「環状線」「歌謡曲」のように、前部要素が4拍あるいは3拍、後部要素が2拍の漢語複合名詞で、前部要素の最終拍が特殊拍であるものに多く生じているからである。5拍語では「誕生日」のように4拍+1拍の場合もある。大阪アクセントの複合規則としては、この場合、前部構成要素の末尾拍に核がくるとされている。

総語彙にどのくらいこの現象が浸透しているかを見るために、複合語であるかどうかを問わず、3拍以上のすべての語から長母音の2拍めと「ん」を取り出し、この2種の拍に核がある場合と、その直前の拍に核がある場合の数を集計した。この集計には6人のデータがそろっていない語も加えたので、この2種の特殊拍の総数は個人により約2.2ないし2.6万拍となった。このうち核を持つ拍は、高年の3名の話者ではそれぞれ9、9、9%であるが、若年では2、3、5%と減少している。一方、自分自身の直前に核があるような特殊拍は、高年ではそれぞれ24、26、28%、若年では31、29、27%となっている。なお、長母音の第二拍と、「ん」で構成される拍には違いは見られない。

以上の関係を拍数別に図示したのが図2である。特殊拍上の核は若年では一貫して、しかも著しく減少しており、逆にその直前に核がある場合が増加していることがわかる。特殊拍の直前に核のあるものの増加分のすべてが、次の特殊拍にあるべき核が前にずれて生じたものとは限らないが、およその傾向がうかがえる。

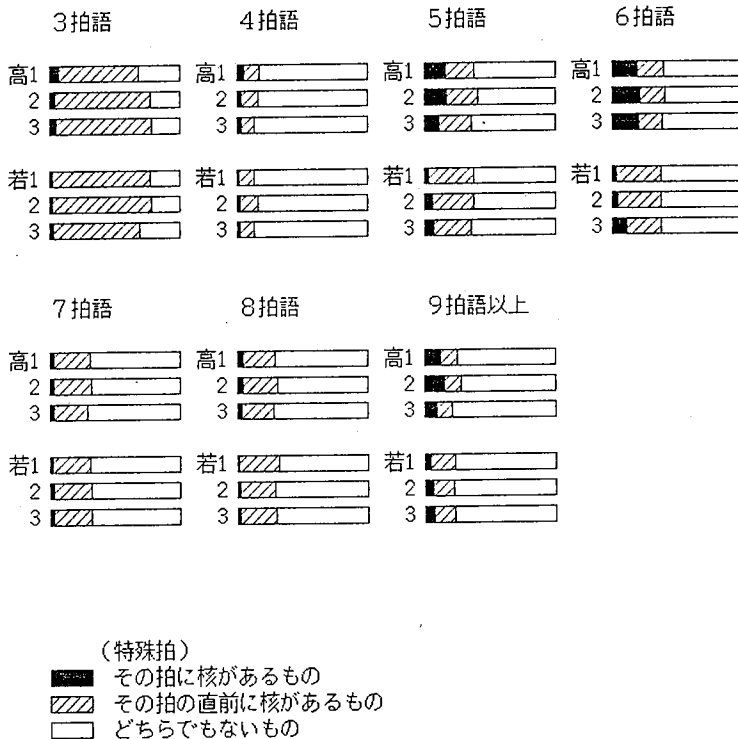


図2 特殊拍全体のうち、核があるものと、直前に核があるものの占める割合

以上の数値や図がすでに示唆しているように、同類の複合名詞で前部要素の最終拍が特殊拍である語のすべてが核前1拍ずれをおこしているわけではない。高若対立例で見れば（付録参照）、4+2型、あるいは3+2型の複合名詞で前部要素の最終拍が特殊拍である語では、高年では特殊拍に核があるのに若年では無核型になっているものが35語ほどある。第6節で検討するように、前部要素の最終拍が特殊拍でなくても、若年で無核化している複合名詞は多いので、その一環と考えるべきであろう。

また、特殊拍核回避の傾向は、若年話者に至って急に生じたものではなく、実は高年話者にも相当数現れている（「救急車」「展覧会」（以上高起式）、「施政権」「同窓会」（以上低起式）等）。逆に、若年でもなお特殊拍核が残っている語がある。特に、「うっとうしい」「ずうずうしい」などの形容詞では特殊拍核の残存は著しい。また複合名詞でも「試験官」「世界観」「補償金」のような例や、「三月」「三時」「今週」「今度」のように「三」や「今」を第一要素とする複合語や、「根性」「根本」「昆布」「近所」などの例もある（「三月」以下の例は角道正佳氏の御教示による）。しかし、現在の高年層と若年層の間には大きな隔りがあり、高年ですでに徐々に変化していたものが、現在の若年に至るまでに急激に進行し、もはや若年では変化を終えつつあるのではないかと思われる。日常的な観察からも、特殊拍核の有無は現代大阪の高年層と若年層のアクセントを分ける典型的な世代差であるということが出来る。大阪方言は、語音がアクセントを動かすことがないとよく言われてきたが、その主張を支えてきた重要な根拠のひとつはもはや崩れさろうとしている。

「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」は、基本的には「発音しやすさ」をめざした自律的な変化であるとするのが妥当かと考えるが、この変化の結果、核の位置が東京アクセントと一致するものが増えており、それゆえアクセントの東京化の一環であると考えられることもできよう（第9節参照）。この現象の意義、および音響データについては杉藤(1986a, 1986b)を参照されたい。

なお、特殊拍に核がある例ではないが、低起無核語は、最終拍が特殊拍の場合、語末から2番目の拍から高く実現することがある（例：「エアコン」——）。これは特に若年のひとりの話者（No. 3）に著しい。

特殊拍をめぐる語音とアクセントの関係に触れた関係上、母音の音質とアクセントの関係も検討しておく必要がある。どの母音音素を含む拍が核を担うことが多いかを3拍以上の総語彙について集計したところ、5母音のうち/u/を含む拍に核のある割合は、高年の3名の話者ではそれぞれ17、17、17%、若年は17、16、16%で、差らしいものは見られない。/i/では高年の3名が21、22、21%のところ、若年話者では3名とも19%と、やや減少しているかにも見える。しかし、狭母音に核を置くことを回避するはっきりした傾

向があるとは言いがたい。／a／は高年で27、27、27、若年で27、27、28%、／e／は高年で12、12、12、若年で13、13、13%、／o／は高年で22、23、23、若年で25、24、24%を占めている。

## 6. 無核化

無核化に属するものは187例あり、高若対立例全体の15%を占める。語の拍数による分布のかたよりはない。個々の対立例を見ると、高年で高起式有核のものは若年では高起のまま無核に、高年で低起式有核のものは若年では低起式無核へというように、式は保持したまま無核化する例がほとんど(83%)である。一方、高年で無核の語が若年で有核化している例は高若対立例全体の11%であり、無核化の事例よりも少なく、またそのほとんど(81%)は3拍語と4拍語にかたよって分布している。したがって、対立例について見る限り、無核化というものを高年話者から若年話者へのアクセント変化のパタンのひとつとしてよいと思われる。そして、それはもともと無核の型が少ない5拍と6拍の、やや長い語に顕著であると言える。

しかし、総語彙について見た場合、3拍以上の語のうち、無核型の語が占める割合は、高年の3名ではそれぞれ54、51、55%、若年の3名ではそれぞれ55、54、55%となっている。このように、総語彙に対しては、顕著な年代差も個人差もあるとは言えず、現代大阪アクセントで高年から若年への変化傾向として無核化が顕著であるとは言いがたい。

図3は総語彙に対する無核の語の割合を、高起式と低起式とに分けて、拍数別および話者別に図示したものである。

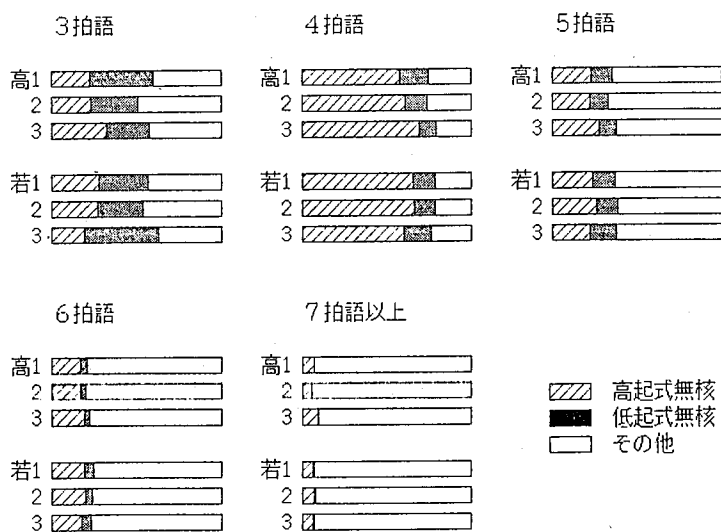


図3 総語彙に対する無核の語の割合



5、6、7拍で無核化している語を見ると、複合語が1語として熟したためではないかとも思われる例も少なからずあるが、すべての事例を説明する要因とは言えないように思われる。東京語でもアクセントが無核化する語が増えていると言われるが、大阪でも並行的な現象が見られるのは興味深い。また、それゆえに東京アクセントの影響とも考えらようが、個々の語についての立証は難しい。

東京語では外来語を中心として、専門家アクセントといわれるような現象がある。専門語が専門家やマニアの間で無核アクセントで発音される現象であるが、それが全国に、また一般にも定着して行く傾向がある（「マネージャー」、「メンバー」等々）。テレビ、ラジオ等を通じてよく耳につくのは、音楽・芸能関係あるいはスポーツ関係の用語である。大阪ではこの現象は今のところ顕著ではないようだが、調べ得た3拍以上の外来語3241語では、無核型は高年がそれぞれ6、6、8%、若年は7、7、7%と世代間に差はないようである。しかし、このうち低起無核型のみ注目すると、高年は1、1、0%（語数にして35、36、16）、若年は2、2、2%（語数にして49、50、73）と増えているかのようである。無核化した語を見ると、例えば4拍語では「エアコン」「SF」「FM」、「ジーパン」、「Tシャツ」、「ゼラチン」、「マラソン」（以上は若年の3名とも低起無核型、かつ高年で無核型が全然ないか、1名だけのもの）や、「アトリエ」「アドリブ」「アネモネ」「エスプリ」「オーディオ」「オーボエ」「オーロラ」「オカルト」「オムレツ」「ガソリン」「カツレツ」、「ギロチン」「グラタン」「コンクリ」「ジストマ」「スタジオ」「ステレオ」「ソプラノ」「トーチカ」「フィルター」「リベート」（以上は若年のみに低起無核型が現れる例）がある。これらのうち「SF」「FM」などは東京の専門家アクセントの取入れの可能性がある。

## 7. 2アクセント単位以上からなる型の減少

高若対立例のなかに、少数であるが「がたがた」のような4拍の畳語が、高年の「\_\_」\_\_」に対し、若年で「\_\_\_\_」または「\_\_」\_\_」となっている例がある。

4拍の畳語の擬態語は、そのまま、あるいは「と」をつけて「がたがた（と）鳴る」のように副詞的に用いる場合と、「がたがたや。」のように指定の助動詞「や」などを付けたり、「に」「の」「で」をつけて形容動詞的に用いる場合はアクセントが異なる。

4拍の畳語で前者のような使い方であると調査時に指定してあったもののうち、調べ得た200語について集計すると、高年では「\_\_」\_\_」型が14%以上（話者No. 2は95%、他は15、14%）を占めているのに対し、若年では話者No. 1が2回（1%）出現するのみで、No. 2、No. 3ではこの型は皆無である。そして、高年ではそれぞれ80、1、66%であった「\_\_\_\_」が若年

では95、96、94%に増えている。高年でもNo. 1の話者はかなり若年に近いが、高年と若年間の断絶は明瞭である。なお、「や」や「に」が付いて形容動詞的に用いられる場合は、高若とも「\_\_\_」が多い（高年は91、71（残りは「\_\_」）、71%（残りは「\_\_\_」）、若年は97、92、95%）。

豊語における「\_\_」から「\_\_\_」への変化は、2アクセント単位からなる単語のアクセントが、1アクセント単位の型へと変化したものと見ることができる。元来大阪アクセントは「国家公務員（\_\_\_「\_\_\_」）」、「国際通貨基金（「\_\_\_」）」、「生活協同組合（\_\_\_「\_\_\_」）」（最後の2つは6者一致例）のように、2アクセント単位以上からなるような複合語が多い。それほど長くなくても「いちはやく（「\_\_」）」、「いますこし（「\_\_」）」のような例を見つけるのに苦労はしない。これは、東京アクセントなどに比べた場合の大阪アクセントのひとつの大きな特徴であった（和田(1932),川上(1977)参照）。すなわち、複合語を構成している各要素が本来のアクセントを主張し、アクセント的に1語として融合しにくいわけである。高年話者ではこのような2単位以上のアクセント型が、3拍以上の語全体の2%（3名とも：語数にして1030、1211、881）出現しているが、若年では1%（3名とも：語数にして694、770、769）とやや減っている（なおここでは、語末が特殊拍のために「\_\_」と見かけ上2単位型となるようなものは計算から除外している）。アクセントが2アクセント単位以上からなる語は7拍以上の語に多く、6拍以下では平均2%、7拍以上では27%に見られる。しかし、こうした2単位アクセントから成る語の減少は6拍以下の語により顕著、6拍以下では語数にして高年が554、726、514のところ、若年が348、374、347で平均で3/5に減少している。7拍以上では高年が476、485、367、若年が346、396、422で平均して7/8になっている。このように、長くない語は1アクセント単位で、すなわち音調的に1語で言おうとする傾向が若年話者に存在するようである。

## 8. 特定の形態素をもつ語のアクセントの変化

高若対立例には以下のような特定の接尾辞がからんだ一群がある。

(a) 「痛さ」、「黒さ」のように、形容詞語幹に名詞化接尾辞「さ」がついた3拍の語： 高年の「\_\_\_」に対し、若年は「\_\_」。

(b) 「辛み」、「高み」のように、形容詞語幹に名詞化接尾辞「み」がついた3拍の語： 高年の「\_\_\_」に対し、若年は「\_\_\_」。

(c) 「悲しげ」、「楽しげ」のように、形容詞語幹に名詞化接尾辞「げ」が

ついた4拍の語： 高年の ———— に対し、若年は ————。

(d) 「ずらりと」、「きらりと」のように、「り」で終わる3拍の擬態語に「と」をつけた形： 高年の ———— に対し、若年は ————。

(e) 「あさはか」、「ほがらか」のように、「か」で終わり形容動詞語幹となる4拍語： 高年の ———— に対し、若年は ————。

以上の5種と同じ語形成の語を総語彙から集計したところ、上のような差はかなり規則的なもので、いずれも世代差と呼べそうなものであるように思われる。

(a) 「～さ」類について調べ得た30語では、高年話者の ———— の出現率は97、70、80%、 ———— が3、23、17%であるのに対し、若年では ———— が7、53、0%、 ———— が93、47、93%と、このふたつの型の占める割合が逆転している。

(b) 「～み」類について調べ得た15語では、高年話者では ———— が53、60、33% (語数にして8、9、5)、 ———— が47、40、67% (語数にして7、6、10) の出現率に対し、若年では ———— が7、33、13% (語数にして1、5、2)、 ———— が93、53、80% (語数にして14、8、12) と高起無核型が増えている。

(c) 「～げ」類について調べ得た9語では、高年話者では3名とも100% ———— であるのに対し、若年は ———— が0、0、22% (2語)、 ———— が100、100、67% (6語) であり、高年の ———— は若年で多くが ———— になっている。

(d) 「～りと」類について調べ得た43語では、高年では ———— が100、93、86%出現し、 ———— は1回出現するのみであるが、若年では逆に ———— が98、100、100%で、これも型がほぼ完全に交替している。

(e) 「～か」類は、調べ得た40語のうち ———— が90、83、93%で ———— は皆無であるのに対し、若年では逆に ———— が88、78、75%出現し、 ———— は0、18、13%で、高年の ———— が若年ではだいたい ———— になっている。

以上のうち、4拍の「～げ」類、「～りと」類、「～か」類では、高年話者ではアクセントは安定しており、変化の兆しはほとんど見えないのに、若年では高年と異なるアクセントが大勢を占めている。特に「～りと」と「～か」ではアクセントはほぼ完全に交替している。交替の急激さと、変化後のアクセントが東京アクセントの核位置に一致していることから、この変化は東京アクセントの取り入れという可能性がある。

一方、3拍語の「～さ」類、および「～み」類の変化は比較的緩やかである。

変化の兆しはすでに高年話者の間にもあり、若年話者の間にも高年と同じ型がかなり残っている。「～さ」類でも「～み」類でも、若年で高年と同じ型を多く出現させているのは2番目の話者である。変化前後のアクセントから見て「～さ」類と「～み」類の変化は大阪アクセント体系内の自律的な変化かと思われる。

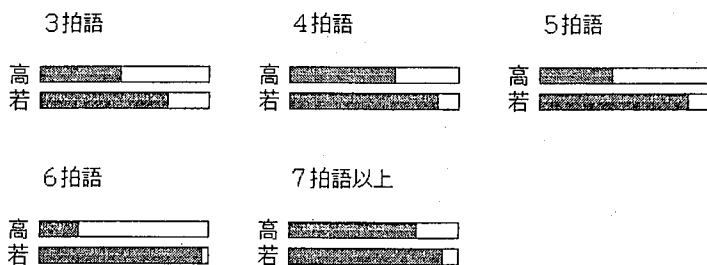
1拍の接頭辞のつく語にも一定の変化の傾向が見られる。高若対立例中、「お」「御」「小」「不」「無」のつく語で若年で  $\_ \text{—} \_ \_$  や  $\_ \text{—} \_ \_ \_$  のような、低起式で語頭から2拍めに核のあるアクセントが相当数増加しているのがそれである(例: お芝居、ご祝儀、小魚、不真面目、無免許)。ただし対立例以外の語では、高年話者でも低起式で語頭から2拍めに核のある型をとる例が多く、以前のゆるやかな変化の延長であるかと思われる。

## 9. 東京化

以上、資料に現れた高若対立例を手がかりにして、大阪アクセントの年代差のいくつかの類型を見てきたが、現代の日本の若年層のアクセントを考えるとどうしても検討しなければならないのが東京化ということである。真田信治氏は、兵庫県西宮市では2拍名詞の4類と5類のいずれもおもに東京と同じ頭高のアクセントで発音されること、そしてこれと同時に助詞がついた場合でも4類5類ともに  $\_ \text{—} \_$  と発音されることが少なくないという坂田直子氏の報告を紹介し、後者のような現象が生じるに至った経緯として、語単独の場合に4類と5類のアクセントが同じになったことに加え、標準語の干渉が考えられると指摘している(真田(1987))。このようなアクセント体系全体をゆるがすような大がかりな東京化は今のところ大阪市アクセントには見あたらないようである。しかし、第8節で検討したような、特定の形態素をもつ語で東京アクセントを取り入れたかと思う例や、第6節で見たような専門家アクセントの取り入れかと思われる例のように、個別的な東京化が進行していると考えるのが自然である。

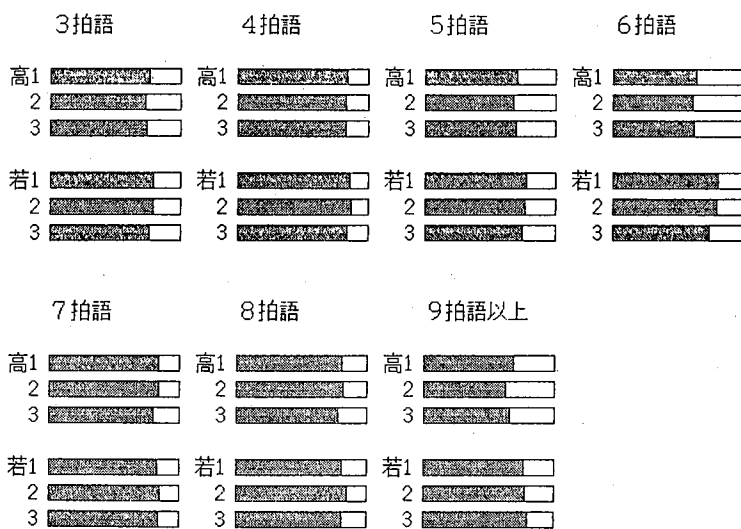
高若対立例には出てきていないが、 $\_ \text{—} \_ \_$  しかないはずの3拍形容詞に若年で  $\_ \text{—} \_$  が現れたり(例: 「すごい」「淡い」)、「しい」の直前で下降すべき「しい」形容詞に、 $\_ \text{—} \_ \_ \_ \_ \_ \_$  (例: 「すがすがしい」「かいがいしい」)のような型の出現も、東京化の可能性もある。また、「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」によって、若年の多くの複合語のアクセント核の位置が東京と一致していること、さらには無核化も、大きな意味で東京アクセントの影響と見ることできるかも知れない。とはいえ、個々の例について、東京化によるものか否かを立証するのは不可能である。

東京化の度合を探るために、高起・低起の別は考慮せずに、核の位置のみに注



(高・若対立例について)  
 ■ 核位置が東京と一致  
 □ 核位置が東京と不一致

図4 東京アクセントとの核位置一致率(高若対立例中)



■ 核位置が東京と一致  
 □ 核位置が東京と不一致

図5 東京アクセントとの核位置一致率(総語彙中)

目して東京アクセントとの一致度の高若の差を調べた。高起・低起の別を考慮しないのは、この区別に流動的な面が大きいことによる。ここで東京アクセント見なしたのはNHK編「日本語発音アクセント辞典」改訂新版（1985年）である。

まず3拍以上の高若対立例のうち、アクセントが1単位の型で東京と比較できる語について、東京アクセントとの核位置一致率を算出した。

図4はこれを拍数別に図示したものである。総数から見ると、高年では、比較できる1205語のうち47%が核位置が東京と一致するのに対し、若年では1214語のうち実に88%が一致している。この顕著な差は、実は複合語における若年の「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」によるところが大きい。仮に「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」は大阪アクセントの自律的な変化であって、結果的に東京アクセントに一致したものが多くなっているのであると考えて、これによるものを除いたとしても、若年のアクセントの85%は東京の核位置に一致しており、高年話者よりも東京との一致率は大幅に上昇している。

次に総語彙について東京との核位置一致率を算出した。図5はこれを拍数別に示したものである。総数では高年話者の東京との核位置一致率はそれぞれ77、75、75%であるのに対し、若年の3名は82、81、79%である。対立例の場合より差はずっと小さいが、東京との核位置一致率はやはり上昇しているように思われる。ここでも、「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」を除外して、特殊拍をまったく含まない語（欠測データがある語も集計に含めたので、話者により1万2千ないし1万3千語）について東京との核位置一致率を計算すると、高年の3名は72、69、69%、若年は75、75、73%となる。統計的検定になじまないデータではあるが、東京との核位置一致率が若年でやや上昇していることは否めないと思われる。なお、3拍語ではいずれの話者もやや東京との一致率が低く、大阪独自のアクセントが多いことを示している。

もちろん、東京との核の位置の一致率の増加がすべて東京アクセントの取り込みと解釈できるわけではないが、核位置一致の増加の度合いが総調査語彙では低く、高若対立例では高いということから、少なくとも高年話者3名と若年話者3名のアクセントが対立している語例に関する限り、東京化という要因が大きく働いている可能性が高いと考える。

## 10. まとめ

大阪出身の3名の高年話者と3名の若年話者の単語アクセントを約7万語について調査した資料にもとづいて、高若の世代差の類型を記述した。

高年話者と若年話者のアクセントが対立する語では、①核の有無と位置は保持したまま、高起式から低起式へ、あるいは低起式から高起式へという高起・低起の転換、②高年のアクセントで特殊拍に核があるような語で、若年では特殊拍に

核を置くことを避け、その一拍前に核を規則的にずらす場合、そして③若年における無核化が顕著である。このうち②の特殊拍上の核の扱いの差は明かな世代差である。しかし、①については高起・低起の別は高年においてもかなり流動的なものであり、世代差というよりも個人間の変異と見るべきものかと思われ、③についても現代大阪アクセントの変化傾向として顕著なものとは言いがたい。

このほか、1～3拍語の拍内下降の消失傾向、高起式で語頭から2拍めに核のある型の減少、2アクセント単位からなる語の減少が見られる。特定の形態素を持つ語では、形容詞語幹に名詞化接尾辞「さ」がついた3拍の語が — から — に、形容詞語幹に名詞化接尾辞「み」がついた3拍の語が — から — に変わりつつあり、形容詞語幹に名詞化接尾辞「げ」がついた4拍の語が — から — に、「り」で終わる3拍の擬態語に「と」をつけた形が — から — に、「か」で終わり形容動詞語幹となる4拍語が — から — に変わっている。また、1拍の接頭辞のつく語では、低起式で語頭から2拍めに核のあるアクセントへの変化が進んでいる。

特殊拍に核を置くことの回避、拍内下降の消失傾向、高起式で語頭から2拍めに核のある型の減少、そして2アクセント単位からなる語の減少は、これまでの大阪アクセントらしさを支えてきた特徴を失わせるような重大な変化である。そして、これと並行して東京アクセントと同じ核位置をとる語が増えている。しかし、割合としては高年と若年のアクセントが3対3で対立している語は少なく、高若6名の話者全員が一致している場合が半数を占める。しかも「特殊拍核回避のための核の前1拍ずれ」や、いくつかの東京アクセントの取り込みかとかえうる例を除けば、変化の速度は緩やかであり、また東京化とは考えられない変化例もあることから、なお強力な大阪アクセントの生命力をうかがうことができる。

## 文献

- 楳垣実(1957): 大阪方言アクセント変化の傾向。方言論文集2、近畿方言学会  
川上泰(1977): アクセント単位の大きさ、強さ。国語学、111。  
郡史郎(1984): 大阪方言二音節名詞の疑問イントネーション。近畿音声言語研究会第2回研究発表会発表原稿集。  
真田信治(1987): ことばの変化のダイナミズム—関西圏における neo-dialect について。言語生活、429。  
杉藤美代子(1982): 日本語アクセントの研究。三省堂。  
杉藤美代子(1981): 大阪のアクセント。大都市の言語生活・分析編。三省堂。  
杉藤美代子(1986a): 促音、及び、長音・撥音にアクセントを置く発話の年齢による変化とその音響的特徴。国語学、147。  
杉藤美代子(1986b): 大阪方言の特殊拍にアクセントを置く単語のアクセント変化。音声学会会報、181。  
和田実(1932): 近畿アクセントに於ける名詞の複合形態。音声学協会会報、71。





\_\_\_ ⇒ \_\_\_ 一荷(いっか) 一手 一派  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 呆気(一にとられる) 蕪 辛み 基音 臭み こより 始発 高み  
 手縄 荷箱 野 積み 文語 離礁  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 雄鹿 仕種 無様 不様 御国(みくに) 身なり 無体  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ いやに 子猫 やし油  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 厚着 当て字 衣桁 砂(いさご) 偉人 異人 歪(いびつ) 請け書  
 薄着 薄茶 内気 固め 気組み 危険 着尺 工夫 競馬 仮病 原画  
 原図 口座 焦がす 呼吸 辞世 締め緒 主因 他言 多年 追肥 手垢  
 鳥居 不思議 不順 不純 不足 ふ法 古手 ばかす 保障 保証 補償  
 麻薬 無用 利口 わらじ

#### 4拍語

\_\_\_ ⇒ \_\_\_ 朝顔 ガチャリと カチリと 清元 ぎよろりと きらりと ざらりと  
 ぐざりと ぐしゃりと ぐにやりと ぐらりと ぐるりと(～回る)  
 ごくりと ごろりと ごろりと さらりと すぶりと すらりと  
 ずらりと そろりと ぞろりと 玉虫 ちくりと(～刺す) とろりと  
 (～眠る) どろりと(～する) ぬらりと(～する)  
 ぬるりと(～すべる) びかりと(～光る) ひやりと(～する)  
 びよこりと ひらりと(～飛び降りる) ふわりと(～浮かぶ)  
 べろりと(～平げる) ぼかりと(～殴る) ぼきりと(～折れる)  
 ぼたりと(～落ちる) ぼつりと(～ひと言言う) 皆様 ゆらりと  
 (～動く) ゆるりと(～くつろぐ) わび助  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 冠する 残高  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ ギロチン、マラソン  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 教練 極力 原隊 豪傑 口中 損益 尊公 帝国 本県 本尊 末代  
 歴代  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 運命 元来 後悔 孝行 さりとて 10代 従来 生涯 代々 町長  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 剣菱  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 後後(一まで) 今更 立ち腰 たん壺 ふ化場 変人 補佐役  
 我が輩  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 石灰 縁談 面影 皇帝 転柿(ころがき) さらさら 朝廷 田楽  
 フライト  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 貝類  
 \_\_\_ ⇒ \_\_\_ 商人(あきんど) 姉上 甘酒 飴牛 家々 一時に 恐らく 叔母上  
 叔母上 門口 気がかり 黄緑 極めて 果物 国々 小うさぎ 小男  
 小躍り 小頭 小為替 呼吸器 こぎれい ご苦勞 小魚 小桜  
 ご祝儀 小作り 小包 子育て ご存じ ご亭主 御典医 子鼠  
 濃ねずみ 小枕 小回り 小結 ご利益 品々 鳥々 背泳ぎ そよ風  
 建物 例えば 近しい 手違い 取り口 煮魚 飲み水 緋桜 一汗  
 一泡(～吹かせる) ひと言 ひまわり 無遠慮 不行儀 不器量

- 不作法 不確か 不調和 不定期 不認可 不真面目 不名誉 不利益  
 まないた 真結び 無印 無造作 無添加 無灯火 無党派 無免許  
 無利息 持ち主 矢印 八つ時 山々  
 \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 物騒
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 裏側
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 一件 一山 一天 一斑 居所 親風 蚊いぶし 格好 川魚 気任せ  
 くけ台 消し壺 小謡 潮時 しどころ 日帰り 昼どき 町じゅう  
 見どころ 村じゅう 物陰 山駕籠 横風
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ キューピー 菜の花
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ お芝居 ガチャんと 火曜日 小刀 施行日 地形図 土曜日
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ せっせと
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 一週 かき船 芸なし 前垂れ 見え坊
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ お幾つ くちなし 耳だれ
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ きよときよと くよくよ しくしく(～泣く) とぼとぼ(～歩く)  
 どやどや(～はいり込む) によきによき(～伸びる)
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 愈愈
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ あさはか あでやか うららか 敵か 穏やか おろそか こまやか  
 爽やか しなやか しめやか(～な) 健やか 速やか なごやか  
 賑やか にこやか(～に笑う) ひそやか(～に) 冷ややか  
 ほがらか 誇らか まろやか 安らか
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 打ち菓子 技術師 強打者 くぐり戸 格子戸 前駆車 相場師  
 真冬日
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 改め 一日 縁先 髪結い 墨打ち 大吉 ドル買い
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 心底
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ お鏡 お飾り おむすび 切り張り くず糸 白酒 近々 茶筆筒  
 一夏 2晩
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 揮発油 工場 天皇 わがまま
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ 凍て付く 淫売 王水 お仕着せ おも立つ 担ぎ屋 蒲色 茅葺  
 旧縁 旧跡 旧態 旧名 近々 欣々 近景 見物 庚申 高専 工大  
 甲高 殺し屋 金剛 今生 今夕 さいかち 西国 常会 常習  
 情人 正札 新案 新興 新秋 真宗 新進 新宅 新調 新郎  
 性的 性癖 製法 精米 急き込む 先妻 禅宗 先年 先便 先鞭  
 脱こう 脱腸 中空 中秋 仲人(ちゅうにん) 町営 町名 通告  
 通達 通覧 漬け込む 同勢 同船 根こそぎ 農政 ノンポリ  
 へべれけ(～に酔う) 方角 帽章 北国 明春 明朝 婿入り  
 武蔵野 紋織り 野心家 病みつき 病みつくる いれき 蠟石  
 詫び入る
- \_\_\_\_ → \_\_\_\_ ガンガン 水辺 銭湯 重宝 内角 内郭 年中 弁膜 メンネル  
 優劣

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 海豹 兄嫁 生け花 オレンジ 草花 白滝 立て膝 目覚まし  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 貸し料 ゴム靴  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 腕組み かかり湯 極端 消しゴム 頂上 びっくり 最も 尤も  
 ヨーヨー  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 上がり湯 一札 一発 卑しげ 大空 悲しげ 然して 楽しげ 水桶  
 優しげ わびしげ  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 青柳 甘口 案じる 一抹 陰険 薄皮 薄塩 薄霜 薄墨 内減り  
 内股 うやむや 大持て 公(おおやけ) 小原女 帯締め 帯止め  
 概算 概説 辛口 寒紅 供する 暗がり 暗やみ 現実 在宅  
 遮る さえずり さえずる 猿また 三振 幸せ 信じる 征服  
 煎じる 代用 立ち方 銅製 唱える 称える  
 どのみち(～同じこと) 中売り 中折れ 中ごろ 中継ぎ 仲次ぎ  
 中ほど 偽札 偽者 偽物 縫い箔 飲みしろ 船足 船底 船腹  
 本物 松脂 丸ぼちゃ 宿替え 憂鬱 留年 私

## 5 拍語

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ ブランデー  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 右大臣 非人情 部隊長 不道德 不風流 不勉強 不用心  
 無条件 無頓着 無能力  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ フッキング  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 慰安会 胃腸薬 慰問団 お召しもの 火口原 課税額 家庭欄  
 歌謡曲 機動力 漁業権 駆虫剤 固形食 自衛官 自制力  
 脂肪酸 死亡率 車中談 受験生 滋養剤 知能犯 飛行服  
 非常食 悲壮感 披露宴 舞踏会 舞踊曲 保安官 輸送力  
 ロカビリー  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 伊予すだれ 陰電子 恩報じ 空景気 川魚 漢数字 漢方医  
 軍用機 磁気テープ 素気無い ちゃんちゃんこ みそさざい  
 わな結び わら細工  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 萎縮病 より好み 演技場 加工場 花柳病 機動隊 娯楽場  
 田植え時 飛行場  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 豪華版  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ アーチスト オードブル ポータブル ボンサンス  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ ご足労 主人公 初任給 マホガニー 無煙炭  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ サイン会  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ アイシャドー 一大事 一部分 薄暗い 薄模様 うそ寒い 閏秒  
 同い年 掛け布団 肥びしゃく 黄金虫 宿場町 硯石 すずり箱  
 硯蓋 蔵書印 立て行司 玉手箱 長続き 一儲け 二人口  
 船遊び 船筏 船下り 補償金 保証金 ほたて貝 冥加金  
 ヨーグルト レンタカー

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 恐るべき  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 競馬場 二枚腰 柳腰  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 送り先 表芸 返り討ち 科学戦 化学戦 稼ぎ人 カンニング  
 利き所 棚卸し 店卸し 勤め人 日本犬 人だかり 水こぼし  
 申し分 物語る  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 太鼓持ち 何曜日  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ かつぼう着 常習者  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ お気の毒 お待ち遠  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ もう少し  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ シガレット ピクニック  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 占い者 解剖図 給料日 金曜日 公休日 失業者 水曜日  
 測量図 体操着 誕生日 詳らか 投票日 面会日 木曜日  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 頭痛持ち  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 一張羅 平泳ぎ 古道具 悪ふざけ  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 思し召し 思し召す 朽ち果てる さらさ染め 真実味 静物画  
 備前焼 誘蛾灯  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 座敷牢  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ ごまのはえ  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 相ともに  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 不断草  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ オットセイ  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 片ほとり 使い料 通せんぼ 弾き歌い 本祭り 屋台店  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ いぶかしげ 懐かしげ 睦まじげ  
 \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 朝っぱら 一時的 一夜漬け 日付 扇形 危険性 果物屋  
 御簾中 ご連中 桜色 桜草 差し支え 再来年 信じ合う  
 例えよう(～もない) 食べ物屋 突き破る 作り替え 造り替え  
 作り事 作り出す 作りつけ 作り物 仲間入り 仲間割れ  
 ひとえ物 船揚げ場 普遍性 普遍的 文化系 保証付き  
 舞い上がる 宵っ張り わらじがけ わらじ履き

6 拍語

— — — — —	⇒	— — — — —	30枚
— — — — —	⇒	— — — — —	雁来紅 さや隠元 さやえん豆 性ホルモン 賃貸借 紋ちりめん 紋羽二重
— — — — —	⇒	— — — — —	重ね重ね
— — — — —	⇒	— — — — —	一段落 立往生 練り歯磨き 飲み友達 一踏ん張り
— — — — —	⇒	— — — — —	光合成
— — — — —	⇒	— — — — —	会計学 外交官 外交団 外用薬 組合長 芸能界 高校生 新年会
— — — — —	⇒	— — — — —	かっぱう店
— — — — —	⇒	— — — — —	がまの油 議会政治 見物席 相続権 相続税 相続分 病知らず
— — — — —	⇒	— — — — —	お使い番 警察犬 玄関先 立ち退き先 捕らえ所 ブラウン管
— — — — —	⇒	— — — — —	じわりじわり ぼつりぼつり(〜と)
— — — — —	⇒	— — — — —	トーナメント
— — — — —	⇒	— — — — —	一直線
— — — — —	⇒	— — — — —	安全ピン 安全弁 案内嬢 一円札 一般論 入会権 院外団 運送業 運送店 影響力 曳光弾 永住権 衛生学 閱兵式 閲覧券 遠近感 円周率 遠心力 厭世感 応援団 オークストラ 横断面 音数律 懐旧談 海水浴 回数券 回そ業 回転軸 回転率 解剖学 解放感 学生服 活動力 観桜会 官給品 観光税 観光団 感光膜 環状線 乾燥室 感想文 含そ業 観念論 慣用音 がんろう物 救急箱 急行券 吸収剤 吸収力 及弟点 共進会 銀行券 経験論 経済界 経済学 経済人 経済面 計算尺 激中劇 決定論 現業員 言行録 原材料 現在量 研修生 現象界 現象論 県人会 減税案 現像液 建造物 元老院 航海術 航海長 交換会 高級店 航空券 鉱山業 香辛料 興信録 合成物 構造物 坑内服 公民権 講演会 最大級 裁判官 殺菌剤 酸性岩 七面倒 執行権 実行力 実在論 失望感 死に学問 尺貫法 終業式 終身官 集中力 周遊券 取れん剤 出場権 傷害罪 上棟式 少年団 傷病兵 商品券 情報源 照明弾 条例案 食塩水 神経質 寝台券 進駐軍 神通力 人名録 水成岩 聖誕祭 西洋館 専用権 川柳点 造船業 相談会 相当官 騒乱罪 促音便 即興曲 卒業生 存在論 對抗策 大道芸 大礼服 卓球台 虫垂炎 抽せん会 駐留軍 聴聞会 鎮痛剤 沈殿物 追悼会 抵抗感 抵当権 点眼水 伝声管 店頭株 天道虫 入場券 忍耐力 風成岩 複製品 文芸学 文献学 分類学 平行線 平行棒 閉塞音 勉強会 編集権 変成岩 変性剤 防衛力 冒險談 放送界 放曹界 放送劇 暴走族 防虫剤 方法論 芳名録 本草学 本体論 万年床 万年雪 満塁策 耳学問 民間人 毛細管 有功章 優生学 優先権 優待券 有袋目 有蹄類 郵便局

遊覧客 要求額 陽明学 落慶式 略本暦 領空権 両生類  
 領有権 冷水浴 錬金術 練習生 労働権 論争点

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

青物市 あとう限り 一時預け 一部始終 かかあ天下  
 御幣担ぎ ジェット気流 住宅街 住宅難 証拠調べ  
 吸い物膳 吸い物椀 素襖袴 朱雀大路 台詞回し  
 総司令部 例え話 造り酒屋 作り笑い 取引員 取引高  
 中折れ帽 仲間外れ 二段構え ひじ掛けいす 不変資本  
 夢遊病者 柳ごうり 憂うつ質 ヨードチンキ 礼儀作法  
 私ども

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

鶯餅

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

取引先

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

当たり所 一文銭 運送人 海賊船 海賊版 かわたれ時  
 鑑定人 灌木帯 恐水病 空中線 交換船 こう原病 高山業  
 公式戦 後半戦 国内線 最終戦 参けい人 実験台 実物大  
 就職先 終盤戦 審判台 睡眠病 精神病 前半戦 争奪戦  
 相談役 体操場 弾性体 挺身隊 電光板 展望台 糖尿病  
 日用品 文明病 盲導犬 練兵場

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

芸なし猿

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

幾久しく

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

大阪ずし 押し割り麦 16ミリ 慎ましやか

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

現実主義 立候補者

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

いたずらっ子

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

立ち退き料

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

かんしゃく玉 新参者

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

見よう見まね

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

別あつらえ

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

貸付料

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

もの足りなさ ものものしげ 弱々しげ

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

銅色 うぐいす色 うぐいす張り 薄樺色 公沙汰 現実性  
 現実的 小切手帳 濃ねずみ色 しっかり者 証拠立てる  
 正直者 沢庵漬け 玉虫色 生臭物 不屈き者 私事

\_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_

土用の明け 土用の入り

## 7 拍語

- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 比例代表
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 一時預かり 刺身包丁 浄土真宗 スターシステム  
総司令官 二枚看板 保証責任
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 証券会社 製薬会社 賃金格差 方角違い
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ お力落とし 原子力船 捕まえ所
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ お手柔らかに
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 終わり初物
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 青物市場 オレンジジュース 住宅ローン 取引所法  
中折れ帽子 目覚まし時計 もっともらしい
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 優柔不断
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 失礼ながら
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ もの珍しげ

## 8 拍語

- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ ジェットコースター
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 在郷軍人 私小説
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 水生植物
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 有機化合物
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ うんともすんとも
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 無着陸飛行
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 文芸復興
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 末梢神経
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 一般大衆 齋戒もく浴

## 9 拍語

- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 小売物価指数

## 10 拍語

- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 海難審判庁
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 最低賃金制
- \_\_\_\_\_ ⇒ \_\_\_\_\_ 法定得票数